第38回　地域政府と政策を考える研究会「政界の変遷を振り返り、現在・今後の政治・政党のあり方を探る」

戦後北海道の政党政治における「革新」の構想と戦略
―横路家二代の政党指導から―

北海道大学大学院法学研究科　准教授
前田亮介

はじめに

ただいまご紹介に預かりました前田と申します。北海道大学で日本政治史、日本政治外交史を担当しております。今回、お話の機会をいただき非常に光栄です。簡単に自己紹介をしますと、専門は戦前日本政治外交史です。一次史料を集める調査研究しておりますが、戦前と戦後ではかなり差がありまして、例えば、博士論文で一次史料を使うのは、戦後内政史だと一九五〇年代くらいまで、戦後外交史だと七〇年代、八〇年代でもあるような状況です。

また、今日会場におられる山本健太郎先生の専門である「現代日本政治」も学術分野として非常に発達しており、二次文献をアップデートすることも大変な状況です。そうした中で、どのように私の強みを出せばよいかを考えたのですが、現在、同僚でもある山崎幹根先生と道庁の北海道史の編さんに関わっておりまして、アットランダムにではありますが、道内外からたくさんの史料を集めておりますので、今回はそれを元に散文的とはなりますが、お話したいと思います。ただし、土地勘などを含めて見当違いなことを話しているかもしれません。そうした点につきましては忌憚なくご教示いただければ幸いです。

1　なぜ、戦後北海道で社会党、民主党が発展したのか

北海道においては、しばしば「社会党王国」、あるいは「民主党王国」との言い方がなされます。これは五五年体制という事実上の保守一党優位体制の中で、「北海道は例外的な地域であったのではないか」という疑問が湧きます。ただ、道内でも道南は自民党が強いですし、政治学者である高

掲載にあたって

自治労北海道本部と公益社団法人北海道地方自治研究所では、二〇〇二年から「地域政府と政策を考える研究会（主査：佐藤克廣北海学園大学法学部教授・当研究所理事長）」を設置し、政治・社会など幅広い時事問題に関して、共同で調査・研究・分析を実施しています。

今回は、「政界の変遷を振り返り、現在・今後の政治・政党のあり方を探る」をテーマに、第三八～四〇回の三回に分けて研究会を開催しました。第一回目（二〇二三年七月一四日）は日本政治史が専門の北海道大学大学院法学研究科准教授前田亮介さんに「戦後北海道の政党政治における「革新」の構想と戦

畠通敏先生が書かれた『地方の王国』（講談社学術文庫、初版一九八六）では、中選挙区制時代の北海道五区（道東）が取り上げられています。北海道の中でバリエーションがあるのは当たり前なのですが、それでも他の地域のような保守一党優位支配が北海道でなぜ成立しなかったのか。やはり興味深いところです。

しかしながら、この点について先行研究の蓄積は非常に少ない状況です。高畠先生以外では、二〇一三年に出版された建林正彦先生編の『政党組織の政治学』（東洋経済新報社）の中で、大村華子先生と待鳥聡史先生が北海道と愛知の政党地方支部を比較した研究がある程度で、この問いに関しては十分な研究が蓄積されていません。そこで、本日は私の専門に鑑みまして、歴史的な観点からなぜ北海道で革新勢力が独特な発展を遂げたのか。そして、そこにどのような構想や戦略を見出せるのか考察していきたいと思います。

2　北海道政治史上の「家」
―横路家の系譜

北海道政治史上の「家」としては、中川家や町村家、北家などがありますが、今回はケネディ家研究のようなかたちで、横路節雄さんと孝弘さんの横路家を取り上げたいと思います。なお、歴史研究ではお元気な方は「氏」あるいは「さん」づけなのですが、故人の方は呼び捨てにするのが通例でして、以降は呼び捨てにさせていただきます。

(1)　横路節雄（一九一一―一九六七）

まず、横路節雄ですが、マルクス経済学者で非合法時代の共産党指導者である野呂栄太郎の義弟でして、そういう意味でも左翼運動や左翼理論と近い立場にいた方と言えると思います。また戦後の政党建設期、社会党の地方組織が立ち上がる際、社会党道連の指導者として非常に重要な役割を担った一人と言えます。ちなみに、社会党における左右対立は、共産党との関係をどこまで保つかが分岐点となるのですが、彼は社会党左派でありながら、史料を当たってみると明らかに反共という点が興味深いところです。

(2)　横路孝弘（一九四一―二〇二三）

続いて横路孝弘でありますが、彼はどちらかと言えば当時の社会党では右派に属していたように思います。具体的には社会党、公明党、民社党との提携路線を見出していたように感じますし、党



父の横路節雄（1911－1967）と写真に納まる幼少期の横路孝弘（1941－2023）
出典：Wikipediaのパブリックドメインより
（撮影日は1946年以前との記載）

略―横路家二代の政党指導から―」との題で、横路家を視点とした戦後北海道の政治についてご報告いただきました。

第二回目（二〇二三年七月三一日）は、一九九三年の非自民・細川連立政権と村山政権、二〇〇九年旧民主党の政権交代に携わった経験を有する前衆議院議員荒井聰さんに、「北海道と中央政府の関係性・影響　政界の変遷と今後の政治のあり方について」との題で、中央地方関係、今後の展望についてご報告いただきました。

第三回目（二〇二三年八月九日）は、政界再編を専門に研究されている北海学園大学法学部教授山本健太郎さんに「地域政府と政策を考える研究会　座談会にあたって」との題で、野党立憲民主党の置かれている現状や課題を整理したご報告をいただいた上で、研究会主査佐藤克廣さん（司会）、第一回目報告者前田さん、第二回目報告者荒井さん、前述した山本さんの四名による座談会を開催しました。

なお、本研究会の内容につきましては、第三八回研究会（一回目）は『北海道自治研究』二〇二三年一〇月号（本号）、第三九回研究会（二回目）は一二月号、第四〇回研究会（三回目）は二〇二四年二月号に順次掲載していく予定です。

〈編集部〉

内研究会である「新しい流れの会」にも属していました。さらに一九八〇年代から九〇年代にかけての政党が再編する時期の社会党指導者であり、また知事を三期経験し、今日やや忘れられがちなのですが、民主党の重要な創設者のひとりであろうかと思います。

(3) 横路家二代の系譜を考察する

横路家二代の系譜を考える際にキーパーソンとなるのが、道議会議員から参議院議員となった川村清一（一九一一―二〇〇四）です。彼の伝記を読むと田中敏文（一九一一―一九八二）知事と横路節雄、そして川村清一の三人が歓談する写真や横路孝弘が最初に知事選に当選した一九八三年のメーデーでの写真が掲載されているように、川村清一は横路家とかなり近く、父子二代への関わりを通じて一貫して党組織を支えた、隠れたキーパーソンだと言えます。

もう一つは江田家です。横路家は江田三郎（一九〇七―一九七七）、江田五月（一九四一―二〇二一）と非常に親しい関係にありました。横路節雄の墓は平岸霊園にあるのですが、墓誌にある「夕張に生まれ、父が炭鉱労働者であることを誇りに思い、長じて小学校教師となり、戦後日教組の創立に参画し、北海道に日本社会党を育て革新の礎を確立した。国会活動のさなかに倒れ、五六年の生涯を花の散るがごとく散ず」と記したのは江田三郎です。

このように、横路家に注目することは非常に大事なのですが、その反面、地理的な制約と言いますか、北海道政治史を札幌中心に語ってしまうような危険もあるように感じています。そうした意味で、道内の他地域におけるライバルや協力者と対比させながら考察していくことが重要となります。例えば、革新系であれば美唄の岡田春夫（一九一四―一九九一）、北見の永井勝次郎（一九〇一―一九八七）、釧路の岡田利春（一九二五―二〇一四）、それから横路節雄と非常に関係が良かった旭川の安井吉典（一九一五―二〇一二）、さらに村山内閣で官房長官を務めた五十嵐広三（一九二六―二〇一三）などが該当するでしょう。

また、革新に入れるのはおかしいかもしれませんが、横路孝弘は中川一郎（一九二五―一九八三）と関係が良かったと言われています。先ほどご紹介した高畠先生の『地方の王国』でも、道東の中川一郎がいかに札幌の旦那衆（自民保守層）に対し反逆児だったかが書かれていて、彼が革新的というか、社会党と相通じる部分があったと指摘されています。

また、九〇年代以降は新党さきがけから民主党を立ち上げた鳩山由紀夫さんが横路孝弘の最大のライバルと言えると思いますし、鈴木宗男さんについても一九九〇年の帯広市長選以降、八年に渡って社会党との関係を強化していたことが、『代議士とカネ―政治資金全国調査報告』という論集に入った山口二郎先生の「ネオニューリーダーをねらう土着政治家鈴木宗男」という論文に書かれています。鈴木宗男さんは現在、維新に属されていますし（編集部注・一〇月一〇日付で日本維新の会を離党）、そういう意味でもある種の革新性を有しているのかもしれません。

こうした人たちの活躍が北海道に「革新」という独特さを生み出したと考えています。そして横路親子は二人とも流動的、可変的な状況下で政党指導を行っていた。二人の政党指導の結果として、いくつかの長期的な特徴が北海道政党史に生まれたように感じています。

3 社会党道連の誕生とその動向

(1) 一九四五年一二月、無産政党指導者を中心に結成

ここからは社会党道連の話をしていきます。社会党道連は戦前に無産政党の指導者、あるいは無産運動の指導者を担っていた木下源吾、鈴木源重、渡辺惣蔵、喜多幸章、境一雄といった「戦前派」の長老たちが集って作られました。しかしながら、戦前の北海道では無産政党はそう強くなかったため、実際には、戦後になってから新しく支持基盤が作りなおされた面も少なくありませんでした。

社会党道連は一九四五年一二月五日に結成しているのですが、実はこの時、入党者をかなりスクリーニングしています。つまり戦時協力をどれくらいしているかで入党を判断していたようです。その結果落とされた人、落とされかかった人もおり、社会党道連の機関紙によれば境一雄は危なかったと記されています。

さらに、彼らは戦前にルーツがあることに加えて、境一雄以外は社会党右派だったことが重要で

す。片山哲内閣もそうでしたし、木下源吾、鈴木源重は右派の傾向が強く、こうした点からも戦後初期における社会党の中心は右派であったことは明らかです。また、一九四八年三月一一日に喜多幸章書記長が琴似町（現・札幌市）で演説した記録が残っていますが、社会党の今後の方針として、「党大会の決議に基き民主革命を更に検討の上、片山〔哲〕委員長の云う中道政治に進むべき事を強調す」と述べています。ここで言われる「民主革命」や「中道政治」は、共産党排除とイコールに近く、要するに反共的な姿勢を示す資料として読むことができるかと思います。

もっとも、歴史的には社会党の左右対立は有名ですが、道連では実際のところこの戦前派かつ多くが右派の長老たちが党内融和に意欲的でしたので、必ずしも左右で熾烈な争いをしていたわけではありませんでした。まずは結党まもない組織の安定化が大事だったからです。ところが、ちょうどこの頃、芦田均内閣が修正予算案を三党合同で出して、これに最左派の人たちが反発するという事件があり、いわゆる青票組と呼ばれる最左派の国会議員の処遇問題が結党まもない社会党にとって非常に重要な課題となります。青票組は四八年七月一二日に社会党正統派議員団を結成し、その五か月後には労働者農民党を結成するに至ります。

⑵ 北海道ではダメージが大きかった労働者農民党の誕生

おそらく社会党本部として、労農党結成による国会議員の離脱は大打撃というものではありませんでしたが、社会党道連ではダメージが大きかった。というのも、処分された国会議員は一六名いたのですが、このうち北海道関係者は岡田春夫、舘俊三、山中日露史、境一雄、千葉信の五名にわたっていたからで、このうち岡田は除名されます。結局、岡田、舘、千葉の三名は労農党に合流し、また労農党には参加していませんが、和田敏明も正統派議員団に入っていましたので、党内野党みたいな立ち位置にありました。

このような中で社会党道連の地方委員会が開かれるのですが、青票組に対し同情的な声が相次ぎます。議事録によれば北見の永井勝次郎などが同情的な発言をしていますし、右派の喜多幸章書記長自身、「極力除名・脱党には反対して、正規の中央委員会、大会の開催を求むべきである。粛党の徹底、党内デモクラシー確立の上で党の統一強化を計らねばならぬ。中央委員会へは本道として統一ある行動をとりたい」「党の強化統一のため除名脱党反対で押進めて行かねばならぬ」と発言しています。

つまり、右派の社会党道連執行部は最左派（青票組）の処分について、除名や脱党は避けるよう同情的に振る舞う一方で、党中央にしかるべき処遇を取ってもらう。さらに、党内デモクラシーの確立として最左派の人たちが反発している社会党本部右派の西尾末広の問題を取り上げるべきだ、と党本部への批判を明確にする。これが地方委員会での結論になったわけです。

こうした動きは喜多書記長のディフェンシブというか、自己防衛的な姿勢もあったと思います。というのも、除名となった岡田春夫は若者に人気があり、ある種大義を説いている部分があった。彼の支持者は社会党本部がいかに非民主的な組織であることに対して不満を募らせていますから、社会党道連としては批判の矢がこちらに向いてくることも避けたい。そのためにも、彼らには復党の道を用意しながら、彼らの同調者が増加することにも釘を刺す、これが道連執行部の目標でした。

⑶ 岡田春夫について

その岡田春夫ですが、社会党左派を公言しており、原彬久先生の『戦後政治の証言者たち』の中では、岡田春夫と横浜市長だった飛鳥田一雄が、相並んで「最左派」との扱いになっていますが、個人的には、飛鳥田とはやや違うタイプの政治家なのではないかとも感じているところです。

岡田春夫が非常にしたたかな政治力を持った政治家であった一例を紹介しましょう。一九五三年、岩見沢市に労災病院の建設が持ち上がるのですが、美唄出身だった岡田春夫が田中敏文知事を通じ労働省に話をした結果、美唄市が突然有力候補に浮上します。当時の岩見沢市長は自由党系なのですが、市長も急きょ上京して北海道開発庁長官だった大野伴睦や旧北海道四区選出の国会議員だった篠田弘作、佐藤栄作に陳情することで巻き返しを図り、結局両市に労災病院を作ることで落ちつきました。美唄市が割り込んだのは、炭鉱に基盤を持っていた岡田の力が非常に大きかったか

らだ、と言われています。

(4) 党本部に対する不信感と道連の周囲にある三つの課題

社会党道連の話に戻りますが、社会党本部への不信感が顕在化していたことも興味深いところです。ある社会党の政治家は「基本的に云つて、党本部の執行部が片山内閣退任以来の大問題に一度も中央委員会を開いて党員の意志を聞かずに独断的行動に出てゐる。フアツシヨと何等変りのない事は遺憾に耐えない。除名反対ではない。党規により無効であると思ふ」と述べていて、社会党本部に対する改革を要求しています。また、遊説で北海道に来た来た片山委員長も「道連が本部でも非常に問題になつている」と発言しているように、社会党道連は岡田春夫問題をめぐる対内的なガバナンスだけではなく、対外的な自立性を社会党本部の「ファッショ」に対して発揮していたと言えるでしょう。

ただ、社会党道連としても、社会党本体での左右対立が飛び火する形で労農党が北海道で存在感を持つようになった結果、革新票を共産党と労農党という二つの左翼政党から取らなければならない課題を抱えていました。さらに、この時期の社会党道連では内部での造反がある上、地方支部もできていませんから、社会党道連の言ったことが末端まで伝わるかも分からない状況でした。ただ、地方支部の点については保守側も同じで、例えば、町村金吾が知事になった一九五九年の道知事選では、後援会を基盤として支部が発展していったと記録が残っていますが、幽霊会員も多数おり、当時の史料で「ルーズ」と表現されています。

(5) 一九四九年衆院選での大敗

こうした中、一九四九年一月二三日に執行された衆院選で、社会党は共産党との全面対決を打ち出していました。ところが、保守票を奪えずに革新票は他党にとられた結果、全国的に大敗し、これまで野党議席数第一党だったのが最下位に転落、北海道でも横路節雄を含む一二人全員落選となり、社会党道連は結党以来最大の危機を迎えます。

一方、この大敗で明らかになったのは、戦前派による組織化の限界です。それに対して戦後派は大単産の量的な重み、そうした合理的な機動力を持った人たちが、属人的パーソナルが力を持った結果、横路節雄を筆頭に、戦前にルーツの無い人たちをリーダーに押し上げたことになります。したがって、この大敗は社会党道連における戦前派からの世代交代を促す効果があったと言えるでしょう。

(6) 横路執行部の誕生、社会民主主義政党への移行

こうして一九四九年一月以降、横路執行部が生まれていくわけですが、横路節雄の功績を振り返ってみたいと思います。彼は北教組、日教組を基盤とした社会党員だったことは有名ですが、すでにこの一年前の党大会において、中央委員として左右両派から距離をとって、架橋する役割を果たしたことが彼の伝記に書かれています。

また、職場支部を確立してガバナンスを強化したことで、北教組や炭労、国労、全逓、自治労と言った労組幹部がどんどん入ってくるようになり、社会党の機動力を高めるような改革をしていきます。さらに、横路は社会党を「社会民主主義政党」と位置付けていました。こうした姿勢を反映して、社会党道連が一九四九年一月二四日に出した総選挙の報告書は、「社会党は立党以来の反動分子をここに整算し、真に勤労大衆政党として日常斗争に専念するの絶好の機会である。日本国民性の欠点として、極右か極左かの選択は当然であり、今後益々国際情勢からして激化するであろうが、社会民主主義政党としての社会党の前途は多難である。今にして敢然として極右、極左と斗ひ乍ら、人間性の自由と平和的民主主義の確立を計るべきである」と宣言しています。社会党が「極右」に向かう可能性は低いので、ここでの批判の力点は「極左」にあったでしょう。執行部が左派に代わったあとのごく早い段階で、「極左」＝共産党と距離を取る姿勢が鮮明になったということになります。

(7) 脅威であった共産党、民主協議会への対応

実際、当時の共産党は社会党にとって脅威でし

た。共産党は一九四九年の選挙で三五議席を獲得するのですが、道内の当選者は僅か一名ながら、前回から三万票増やしていたと言われています。また、前年一二月ころから、共産党北海道地方委員会では「社共合同」を喧伝しておりました。当時の史料を読むと、共産党は社会党から人材を引き抜いた上で、新しく来た党員も一方的に共産党色に染めるという一連の啓蒙の必要を公言しており、実際、社会党や労農党から有力者が入ってきたと当時の新聞に誇っています。一方、当時まだ議会主義者もいた共産党内からは社会党などから来た人は社会民主主義者であり、それに配慮しなければならないのではないかという趣旨の意見もあったようですが、これに対してもいや、彼らはボルシェヴィズムに憧れてきたのだから、むしろボリシェヴィキ政党にしなければならない、元社会党員・元労農党員の進歩を止めてはならないという論理が機関紙上で展開されることになります。このような啓蒙的視点はいかにも共産党らしいです。

こうした引き抜きに加えて、四九年一月以降、四つの非保守政党、および関連の労働組合を含めた「民主協議会」が組織されました。社会党道連はこの組織については早くから警戒姿勢を示しており、「民主協議会事務局設置に関し、共産党と協議会内で斗うため、絶対社会党から選任する様頑張ることを決議す」というように、共産党を完全に敵視していたわけです。同様な動きは、笠島保が東洋高圧支部で演説したときも「化学労組の統一に対しても積極的に乗出して北労（共産党系）のふくらましを策している共産党のインボオを粉砕せよと激励す」と述べているほか、「横路書記長、日本教職員組合全国大会に共産党との決戦の為福島へ出席」という記録が残っています。社会党道連としても共産党とは何かしらの連携をしないと先に進めないが、あまりやりすぎるのも危険だ、という認識が共有されていたと言えるのではないでしょうか。とは言え、社会党道連内にも和田敏明のような民主協議会の支持者が一定数いたのも事実で、横路執行部としては厄介な問題を抱えていたということは明らかです。

(8) 北海道共産党の社会党観

北海道の共産党について簡単に振り返ってみますと、一九四五年一二月一五日に札幌で開催された日本共産党北海道地方党会議に徳田球一が来札したという記録が残っています。戦後占領期における重要な問題は食糧問題だったのですが、当時の共産党は「人民の管理に移し、市民食糧管理委員会と相俟て人民共和政府樹立が可能となる」と述べ、食糧増産機能を地方自治体から奪って人民管理する姿勢でした。さらに、北海道の運動家だった山名正美は「社会党の分裂政策と斗争せよ」「日本社会党幹部の本質を曝露しなくてはならない」と述べ、社会党への距離を明確にしています。

このように、（少なくとも北海道の）共産党における社会党観は、人民が正しく啓蒙されれば普通に共産党支持者になるはずだが、封建的なものがいろいろと残っているため、社会党を支持しているのだというものです。過渡的存在として（のみ）それを認めざるを得ないと考えており、原理的に自らと異なる左派政党の存在を認めていたわけではない。北海道の「社共合同」とは、ごく短期的な妥協であり、長期的には社会党の乗っ取りと解体をめざす取り込み策であったと言えるのではないでしょうか。

北海道共産党の機関紙『トラクター』一九四七年一月一日号では、広谷俊二が書いた社会党との対話の記録が掲載されていますが、社会党が共産党をどのように批判したかが（イ）（ロ）（ハ）（ニ）の四項目で書かれています（逆にまだこうした自党批判を、一応理性的に掲げる余裕のある時代だったともいえます）。個人的には、このうち（ロ）の「自分たちは、あく迄正しいという強烈な信念を持つ反面、自己の正しさを一方的に主張し、相手の立場や言い分をよく考えず、従つてなつ得させるような言い方をしない」が興味深いところです。さらに「ダラ幹攻げきをする場合、具体的な事実によらず、単に裏切者とか分裂主義とかいって攻げきする」とも書いてあり、共産党側としてもこのような社会党からの批判に対し、納得する一面があったことを示す貴重な史料と言えるでしょう。

また、共産党が過渡期であったことを端的に表しているのは、北海道選出の共産党の女性代議士だった柄沢とし子が一九四六年九月に書いた国会の見聞録からも明らかです。これによれば、「特に言いたいのは道出身議員の共同闘争のことです。北兄弟〔勝太郎・政清〕は労働関係の法案で

は、共産党に反対の立場をとりますが、農村問題になると、いろいろと相談に来て、共産党と共同戦線をはります」「婦人代議士の中で、思想は進歩的でないけど進歩党の紅露みつ、無所属の松谷天光光さんの二人は相当の戦闘力をもつて居ります」などとあまり共産党らしからぬ、保守も含めた道内や女性の連帯について発言しています。

また、ある共産党の方の回顧録によれば、「柄沢さんはやっぱり国会議員をやっているし、社会的な感覚を持っているから、中央から派遣された武装闘争的なオルグと意見が合わないわけ」と書いてあり、彼女の共産党中央と異なる社会民主主義、議会制民主主義観が見えてくるのは非常に興味深いところです。ただ、柄沢も四八年末には「くさつた四党とは違う」と述べるにいたり、この四党の中には社会党も入っていますし、柄沢自身も共産党の五〇年分裂で除名と自己批判を経験していて、中央から来たオルグの人を批判するパンフレットも出しています。そこでは「右翼日和主義者」など典型的なアジテーションの表現が現われ、彼女でさえもそうした熱狂と硬直に絡めとられてしまったと言えるでしょう。

⑼ 反共左派による道連運営と労農党の合流、社会党本部分裂への対応

しかし、せっかく支持を広げていた共産党は一九五〇年以降、武装闘争方針に移ってしまうため、社会党に対して影響力を失っていきます。こうしたこともあり、反共左派の主導で社会党道連は運営されていくのですが、先ほど話したような社会党本部との距離感の一つには、分裂を繰り返すという問題もありました。つまり、本部で左右分裂されると地方支部は困るわけですが、社会党道連はこの危機も上手く乗り越えたように見えます。

例えば、五〇年一月に第一次分裂が起きるのですが、社会党道連は左派支持を固めた上で、右派と中間派の有力議員も包摂しています。五三年には右派道連が分離するのですが、五五年に再統一しています。六〇年には西尾派が分裂して民社党を結成しますが、道内では小平忠を除き、民社党は強い地盤を築くことができませんでした。この理由は、北海道では横路以下、社会党左派がわりと安全保障や農業・漁業といった（他府県では社会党が強くない）政策分野を押さえており、社会党右派の居場所がなかったからではないかと考えています。さらに民主党道連となってからも明確に民社党を排除しており、同じように「民主党王国」と呼ばれながら、民社党の春日一幸が中心となって民主党を結成した愛知県のケースとは少なからず異なっていたと言えるでしょう。

そして、一九四九年総選挙での大敗後、道内で台風の目のような存在だった労農党ですが、これも五七年には社会党道連と合流し、岡田春夫も復党しています。実際には、五四年ころから労農党の支部レベルでは社会党に入りますと言っている人がたくさんいて、声明書のようなものも残っています。道内では結局、民主協議会も解散し、共産党を排除するかたちで社会党道連は一定の地盤を築くことに成功したと言えるでしょう。

のみならず、一九五二年一月の道連大会で統一実現方針が決議されたことを受け、横路節雄は左派社会党の大会でこの決議案提出を先導し、京都府連の右派社会党の水谷長三郎と接近して統一へ動き始めます。元々、横路節雄には左右の架橋への志向があったことは前述しましたが、それはここでも作用したわけで、結果として左社本部内に「社会民主主義政治勢力統一促進委員会」が設置され、横路節雄が事務局長になっています。以上のことから、横路節雄は道レベルのみならず全国レベルでも社会党再統一に影響を与えたと思いますし、またいずれの場合でも、反共的な社会民主主義の軸でまとめたことも重要だったと言えるでしょう。

⑽ 社会党道連の選挙戦術

一九五〇年代以降、いったんおちこんだ北海道社会党の党勢は伸びていき、五五年の統一地方選挙で「偉大な進出振り」と自ら述べて誇っています。実際に市町村議員選挙で一五三名を公認し、一三八名が当選しましたし、道議も三六人中二六人当選し、名実ともに「偉大な」進出をしたわけです。この時の選挙戦術が文書として残っています。会場の皆さんにはその画像を見ていただきましたが、そこに「ボス型戦術」とあります。これは保守系政党が伝統的なボス、いわゆる地域ボスに頼った選挙戦術をしていることを示したものです。

これに対して、ポスト「ボス型戦術」として「ピ

ラミッド型戦術」を採用したというのが社会党の主張です。これは選挙の統制をしっかりやるとの意味もあり、具体的には「党員の立候補はすべて公認候補者とし非公認は一切認めない。しかも党員にして無所属を表明する者に対しては断乎たる処置をとるという原則をあくまで守り公認証の発行は道連一本とした。従つて、町村議員候補についても支部長の公認証だけでよいという従来の方針を一擲したのである」と記されています。

また、思想史的にこの文書が興味深いのは、政党あるいは党派の存在意義を強く擁護している点です。山田央子先生によれば、日本では伝統的に、良くない集団を組むという意味の「党派」あるいは「徒党」との言葉があるように、「党」という言葉がネガティブだったとされています（『明治政党論史』創文社、一九九九）。私党批判というのが戦前から典型的であったように、政党は、思想的信条の違いを問わず道徳的、倫理的に汚らわしい存在として考えられがちで、それは政党内閣制が崩壊した一九三〇年代から戦中にいたる過程でより強まっていきました。以下はそのような戦前からの反政党論に対するアンチテーゼとして読み取っていただきたいのですが、社会党道連はピラミッド型戦術を示した上記の文書のなかで、「封建性の顕著なるものは政党無用論」であり、「超党派性の名によって代表されるボス議会」がその一翼を担っていると述べています。恐らく、戦時中の大政翼賛会の成立に見られるように、党派批判が吹き荒れた結果、日本政治からあらゆる政党が解消したことも念頭にあるかと思いますし、だからこそ、政党という存在がピラミッドを築いて選挙を回すことが重要だと言っているわけです。自民党内にも同時代にあった「党近代化論」とはまた別の文脈として、ここに紹介した次第です。

さらに北海道の特徴として、北海道農民同盟の力が強いことが挙げられます。実は、戦後初期のころは社会党と農民団体は対立しており、また自前の農民政党を作る動きもあったのですが、五〇年代に入ってもうこのころには親社会党に旋回し、社会党道連のマシーンとなっていきます（北海道農民同盟は六〇年に北海道農民連盟と名称変更して今日にいたります）。そして五五年の地方選挙ではすでに、（社会）党、労、農の三者が合わせて浮動票を吸収し、経済的利害に沿って各候補者を協力提携させていた様子が窺えます。

⑾ 政策、利益政治に強かった社会党道連

一九六二年一一月、横路節雄は社会党道連書記長となりますが、戦後の北海道社会党の特徴として、私は（池田内閣期の自民党とも一面で通じ合うような）脱イデオロギー化といいますか、ある種のリアリズムが存在していたと感じています。それは、農業や漁業の第一次産業に強い政策通の有力議員が社会党道連・道本部に存在していたことからも明らかで、例えば、横路家のキーパーソンとして先ほど挙げた川村清一は、元々は北教組系なので農業も漁業も専門ではないのですが、道庁の支庁長等から学んで、農林水産省では歓迎会をされるほど強い信頼を得ていましたし、農業では芳賀貢も有力議員として名前が挙げられます。

それから脱イデオロギー化という点でいえば、利益政治を赤裸々にやることも北海道の社会党の特徴と言えるでしょう。社会党右派から民社党に行った小平忠が回顧録で、「米価斗争を巡る組織の団結力は全国一でした。従って連年行われる三番町の農水省分室で開かれる米価審議会でのリーダーは常に北海道」と残しているのは印象的です。さらに横路孝弘と親しかった安井吉典も「予算編成は野党に関係がないと考えている他府県の社会党議員から予算折衝に全員で大臣回り記者発表する北海道社会党議員の行動は不思議がられるが、地域社会の問題につねに関心を持ち、その解決のため行動していることが、北海道の社会党の強さの一つの理由でもあろう」と回顧録でやはり記しています。そう考えると、社会党は北海道では、自民党政治流の包括政党性を先取りしていた一面があったのかもしれません。

⑿ 社会党道連のリアリズムが垣間見えた安全保障構想

周縁的なことにはなりますが、社会党道連で安保構想があったことも紹介しておきたいと思います。これは法政大学大原社会問題研究所にある鈴木茂三郎の資料の中に紛れ込んでいたものですが、五〇年代半ば、保守党の政治家広川弘禅のアイデアで北海道を複数の県に分ける「分県論」が噴出してきて、社会党は田中敏文知事以下これに大反対するわけです。この時は分県されませんで

したが、おそらくこれへの対応から、総合的な北海道開発機構をたちあげる試案も社会党では当時作っていたようで、それによると、「国土開発省」という巨大省庁を新設する、つまり建設省と経済企画庁と各省の建設・企画部門が合わさったかつての経済安定本部的な中央機構を新設するという、社会党らしい省庁プランが考えられていたようです。

さらに鈴木茂三郎の手元に残された資料が興味深いのは、この「国土開発省」と並行して、軍事機能を持たせず、自衛隊を国連による集団安全保障と結び付けるようなかたちとした「国土開発隊」（平和建設隊）も考えられていたことです。つまり、自衛隊やそれに類するものが絶対に存在してはいけないと考えていたわけではなくて、それなりにうまく活用できるのならば存在してもいいのではないかといった、冷めたリアリズムのようなものが社会党道連にあったことが垣間見える資料と言えるのではないでしょうか。

3　社会党王国の誕生と崩壊－革新自治体との関係性

⑴　村山富市氏の回顧

戦後北海道のもう一つの特徴は革新市長会です。このモデルとなったのは田中敏文北海道知事と言えるのかもしれませんが、彼は民社系で存在感が強くありませんでした。むしろ道内に「革新三兄弟」と呼ばれた帯広の吉村博、釧路の山口哲夫、旭川の五十嵐広三という有力政治家がいたこと、そして向坂逸郎の影響下にある社会主義協会が非常に力を有していたことが北海道で革新自治体が広がりを見せた理由として考えられます。これは（とくに後者は）先ほど触れた脱イデオロギー化と背反するので、まだ位置づけに迷っているところはあるのですが。

社会主義協会については、二〇一二年に薬師寺克行先生が編者となって刊行された『村山富市回顧録』（現在は岩波現代文庫）の中でも触れられています。村山さんはこのなかで、「結局、北海道議会議員は横路孝弘とともにみんな民主党に行ってしまった。もともと北海道は社会主義協会が一番強かったところだった。主要な労働組合の指導者に協会派が多かったんだな。社会党王国とも言われていたな。やっぱり横路〔孝弘〕氏の影響力が強かったんだろう。だから北海道の国会議員もみんな右にいってしまった。社会党左派を右派に結集させる力が横路にあったのは知事だから。しかも三期もやればそりゃあ強いわ。道議会議員を押さえていた。そして国会議員は道議会議員を頼りにしているから、道議会議員が民主党に行くとなったら、国会議員もみんないなくなってしまった。だから北海道は国会議員も全員が民主党に行ったんだ」と述べて、北海道における協会派の後退を嘆いています。

もちろん村山さんには社民党に残らなかった横路孝弘への怒りがあるのでこの叙述への史料批判は必要なのですが、北海道の社会党が丸ごと民主党に行ってしまった理由として村山さんは、横路が三期の知事時代に協会派を追い落とし、もしくは右に変え、道議を掌握したからと考えているようです。いまの私に有力な反論はないのですが、以下、現実の歴史はもう少し入り組んでいたのではないだろうかという疑問を念頭に、道内の革新自治体について話を進めたいと思います。

⑵　社会党王国と革新自治体のずれ

話が飛ぶようですが、横浜市長として著名な飛鳥田一雄は革新市長会を設立し、よく会合を行っていました。そこには北海道関係者が何度も登場します。一九七五年の道知事選挙には旭川市長だった五十嵐広三が立候補し落選しているのですが、その年の五月に革新市長会が幹事会を開いたとき、釧路市代表として参加していた富永企画室長が次のような発言をしています。「五十嵐のため三四市から六三万円のカンパありがとう。昭和四六年〔注：一九七一年、塚田庄平が立候補〕は四万の差、今回三二万の大差。北海道革新市長会も帯広の崩壊、北見、赤平を失ない、かわってしまった。昭和五一〔一九七七〕年には山口哲夫さんに攻めてくる。天下分け目がおわり釧路は大阪夏の陣となるか。知事の次に釧路の奪かんといっている。火ぶたはきられている」と述べ、実際、七七年の釧路市長選では各地革新市長が総出で山口を応援したものの、鰐淵俊之に負けてしまいます。

さらに富永は「北海道では自民・公明がのびた。かつて自民は古いボス、今はＪＣ〔青年会議所〕

など若手となり、イメージ選挙をやる。自治労の話ではないが、北海道革新市長＝社会党市長＝自治労市長という印象。だから古く見えてしまって、自民党の方が若返りしているように見える」「公害など開発の歪是正でやろうとした。ところが地域によつてはここは鉄道とかいわれ、開発は条件斗争となり、苦東では条件斗争となつた」と述べ、七五年の知事選では開発へのアンチテーゼに失敗したと指摘しています。つまり、与党が開発政策を正面からやってくる場合にその歪みを是正するかたちで対抗できるのか、と問題提起しているわけです。こうした議論には、社会党王国と革新自治体の間に距離が出来てきたことが示されているように私は感じています。

(3) 自治体課題をめぐる社会党への失望

幹事会の五日前には革新市長たちのブレーンが武蔵野市開発公社ビルに集まって、地方自治懇談会を開催しています。この中には政治学者の松下圭一や行政学者の大島太郎なども入り、革新自治体の今後について議論をしているのですが、議事録を読むと、飛鳥田市政のブレーンだった鳴海正泰が「革新自治体は高度成長のおとし子であった。ミッテランが『不況になると革新自治体は停滞する』といっていた。福祉重点主義は財政的にゆきずまっている。今までの市民参加では魅力がない。政策論争で（自民党）政府に革新自治体はリーダーシップをにぎられた」と述べ、さらに政党批判を展開していることがわかります。

戦後、一九五〇年代の社会党は封建的な政党無用論に対し、「政党は必要だ」と言っていたわけですが、一九七〇年代には、鳴海は「痛感したのは、所詮政党は自治体問題は本質的に分らんということである。社会党は分つてくれるはずだと多少の期待があつたが、分つていない。分ろうともしない。社会党に失望感を味わった。政党の発想では自治体問題はとらえられないところへ来ている」と社会党批判を展開するわけです。鳴海はさらに「政党のワクをこえた本来の自治体の原理、対立の枠組みで考えてみよう」と述べ、京都の事例を出し、「自民、社会、公明、共産、民社までならべるのがいいとはいえない」「革新市長会の名前をやめるべきだ」とまで言っています。鳴海は政党より自治体の方が大事であって、そして社会党を含む政党の論理に革新市長会が合わせていてはダメなのではないかと考えていたようです。これに対し、松下圭一は革新市長会の存在意義はあるし、社会党もまだ大事だと言っていて、二人の間に温度差があるところも注目すべき点かもしれません。

(4) 北海道の「政治風土」への嘆き

一方、北海道地方自治研究所の事務局長をされていた山内敏夫もその懇談会に参加していて、鳴海の意見はごもっともだと言った上で、「社会党がぶつかったのは自治体の問題である。帯広での敗北総括をしたが、知事選で全て敗北となった。帯広で予告していたことが知事選でもでてきた。北海道では野党連合が成功してやつと半分そういう認識が全体のものとならず、漠然と勝てると思つていた。社会党単独でやつた方が恰好がついた。社会党が強いときの社共統一は自民かくしをさせる」と述べています。

また、山内は開発に関してもオルタナティブを出すことが難しいと考えていたようで、「セリフで対決ムード、内部では開発指向ということで、整理できなかった。苫小牧は悲惨であった。対決せず、観客集めをしたり、開発の方法論のみであった。だから負けた」とまとめています。さらに、労組に対しても問題提起をしていて、「社会党の選んだのを受け入れるのでなく、労組独自の政治課題としてやらないといけない。社会党は地域に入らない。社会党は地方政治の機能をどう考えるか。国の下請機関としてしか考えていない」と指摘しています。当時は中川一郎を筆頭に道内の自民が巻き返しつつあり、「自民は道議なんかどんどんたて青嵐会は刺〔溌〕剌となつている。運動の総量がちがう。政治における価値の変容ということがおこっている。ここで自治労が聖職論とかなんとか不毛のことをやっているうちに、さめた大衆から何をやっているのかとなり、自民はそれを利用した。資本の側に比べてわれわれが有効な警戒警報をきかせられなかった」と自己批判しています。

この後、北海道批判が始まるわけですが、「北海道あたりでは低い派閥におきかえられてしまう。正直いって、敗けても勝っても検討することをしない風土がどうにもならない」と発言してい

るのですが、これについても、鳴海は「山内さんはまだ既成政党に望みをかけている。私は望みを失っている」と一刀両断しています。実は革新自治体の中でも「既成政党」たる社会党との関係をめぐってこのような理念的な議論がなされていたのです。

⑸　社会主義協会の時代へ

社会主義協会についてはご存じの方も多いかと思いますので、簡潔に説明しますが、九大教授の向坂逸郎が一九六〇年の三池闘争を指導したことで、社会党内に支配的な影響力をもちました。江田三郎のような構造改革論に対して「日和見主義」だと厳しく批判する一方、共産党を含めたより左派との野党共闘的な志向もあったように感じています。

その後、社会主義協会自体が向坂派とそれ以外に分裂するのですが、千葉県では非常に大きな問題が起きていて、一九七五年九月に日本社会党千葉県本部が『党乗っ取りを策す協会向坂派とは何か』とのパンフレットを出し、その二か月後には、向坂派に乗っ取られている社会党千葉県本部が『社会党千葉県本部問題の真相　ボイコット派のいわれなき誹謗中傷に反論する』というように、クーデター的なことが発生しますが、七〇年代の成田・石橋体制下で協会系勢力は全国的に急伸していきます。

一方、急激に伸びた反動で規制がかかり始めます。例えば、七四年の第三八回党大会において、飛鳥田を入れるために三人副委員長制が提案されたのですが、否決されてしまいます。結局、向坂が協会派の代議員を説得し、再議では満場一致で可決されました。こうした記録からも、協会派が党内ポリティクスで規定的な力を持っていたことが窺えます。

しかしながら、このころから江田三郎の社公民路線と社会主義協会側の野党共闘路線が対立していきます。七七年二月の第四〇回党大会では、協会側から「社会党主導で革新連合政府の成立」が提案されますが、同年七月の参院選以降、中央執行委員会において協会への規制が本格化します。党改革委員会が設置され、横路や田英夫といった「新しい流れの会」系の人たちが、中央執行委員会における改革派としてマジョリティ（一四対一〇）を占め、彼らによって協会派の封じ込めが行われることになります。

結局、社会主義協会は石橋政嗣、および総評議長だった槇枝元文による説得により、妥協的な姿勢に転ずることになります。まず、マルクスレーニン主義者でなければならないとの規定は削除され、代議員も非国会議員の人が強かったのですが、国会議員の権限を強化するとの改革を受容していきます。こうした社会主義協会の転換をどう評価すべきか、私も考えかねているのですが、協会派の園田原三の回顧録を読むと、今お話した中央の指導・要請によって協会は生き延びたと書いてあり、ソフトランディングできたと言えるのかもしれません。このような前提をふまえると、先ほど紹介した村山富市さんの「社会主義協会は北海道が一番強かった」という評価もよりニュアンスのある理解が可能なように思います。

⑹　ソ連による対北海道浸透工作

向坂が親ソ連的な方向に外交政策の舵を切ったことから、社会主義協会にとってソ連の比重は大きく、その中でも特に北海道はソ連側からもかなりの浸透工作があったことが知られています。今のプーチン政権下では全く閲覧できないでしょうが、名越健郎さんがソ連崩壊後に出てきた文書から『クレムリン秘密文書は語る』（中公新書）をいちはやく執筆していますし、最近出された『秘密資金の戦後政党史』（新潮選書）によれば、一九七五年の道知事選で五十嵐広三陣営の参謀だった関田伸男はソ連大使館のクズネツォフ一等書記官に接触し、木材や鯨肉を通じて資金を獲得、これを選挙に利用した形跡がある、と明らかにしています。公平を期すためにいえば、これについては社会党ものちに自ら文書を調査し、ソ連の選挙介入については否定していることも、付け加えておきます。

また、名越さんは、七四年一〇月にクスコフ党国際部副部長が「抑留している日本人漁民を早期に送還することで、北海道における社会党の権威が高まる」と言ったことも明らかにしています。ソ連側が、北海道の社会党には親ソ連派が多いと認識し、期待していたことは間違いないでしょう。対北海道浸透工作には、レポ船のようなスパイ育成策に加えて、よりソフトなものもあり、その一例が帯広動物園のホッキョクグマ外交です。一九

六六年に吉村博帯広市長から社会党代議士の松浦定義に働きかけをし、社会党国際部にいた横路節雄を介して、ソ連からホッキョクグマを導入しています。ソ連としても無償提供することで日本側の好感を得られ、さらに社会党の権威・人気を高めると考えたのでしょう。もちろん道内の政治家も唯々諾々とソ連のエージェントになったとは思われませんので、ソ連側の期待が十分に果たされたかは別の問題ですが。

しかしながら、横路孝弘は明確な反ソ連の立場で知られていましたので、ソ連は一九八〇年代にリアリスティックに横路へ接近してきます。セルゲイ・ラドチェンコという研究者がサハリン公文書館にあるＫＧＢの資料を用いて書いた*Unwanted Visionaries: The Soviet Failure in Asia at the End of the Cold War*（オックスフォード大学出版会、二〇一三）によれば、八〇年代のソ連は、七〇年代からの米中接近、日中国交正常化と平和友好条約、さらにアフガン侵攻や大韓航空機撃墜事件によって国際的な孤立が高まっていたところに、八三年に中国の胡耀邦が来日し、彼ら中国要人が天皇や首相に会い、横路も東京に出向いて会っていたことに神経を尖らせていました。サハリンのＫＧＢはこの動きを、中国が北海道社会党と接近していると捉えたようで、横路が知事になった直後から札幌総領事館を通じて訪ソしてほしいと打診しています（実際は横路が中国を優先していたこともあり、最初の訪ソが実現するのは八五年でした）。このように、ソ連は一貫して北海道の世論に強い関心を持っており、その結果様々な浸透工作を仕掛けてきていたということになります。

⑺　一九八三年北海道知事選挙―道民党の真意

道知事選の話がでましたので、ここからはその話をしていきたいと思います。横路孝弘は安井吉典と同じ「新しい流れの会」にいましたので、社会党内では右派に属していたのですが、知事選では社会党ではなく「道民党」との言葉がよく使われていました。これを政党史的に翻訳すると反飛鳥田執行部の意味となります。横路が健闘し、勝ちそうだという情報を得た社会党本部は気勢を上げてほかの統一地方選候補者への弾みをつけようと社会党道連に対し飛鳥田委員長の応援を受け入るよう連絡をします。それに対しては社会党道連本部と横路選対が拒否し、結局、飛鳥田は投票三日前に旭川へ来て、そこには横路もおらず一人で演説して本部に帰っています。

当選後、『文藝春秋』の編集長が横路孝弘にインタビューした際、「飛鳥田が大票田の札幌に入らなかったからあなたは勝てたのではないか」と聞いているのですが、横路は「飛鳥田さんがどうしたのかというのは僕はまったく知りません」と笑いながら答え、全然敬意を示していないんですね。当選後も「道庁人事には手を着けない。自分が革新に変わったからと言って、人を変えたりしない。飛鳥田片肺執行部を批判してきた私だから、恣意的な人事は絶対しない」と啖呵をきっているわけです。このあたりの話については北海道新聞の横路番記者と三上番記者の方が書かれた『みんなヒーローだった!!』という書籍に掲載されているのですが、ほとんど出回っていないのが残念なところです。

一方、園田原三（協会派）は別の角度から飛鳥田に批判的で、「飛鳥田さんはメイヤー〔市長〕だった。自分の思うままに市職員を動かしていくことができたけど、永田町や三宅坂の発想はなかった」と指摘し、政党的な発想で動いていなかったことを明らかにしています。どちらにしても、美濃部・飛鳥田などから横路孝弘への革新首長の世代交代が進むなかで、自治体と政党の綱引きが新たな形で展開されている示唆深い話と言えると思います。

⑻　北海道における社会主義協会の変化

このような考えを持つ横路孝弘が知事になり、今日会場にお越しいただいている荒井聰先生も知事室長として大活躍されていくことになるのですが、ここで北海道の社会主義協会の変化について話をしていきたいと思います。調べきれていない憶測の話も多いことをご了解いただければと思いますが、一つ確かなことは、一九八六年、鈴木茂三郎が委員長時代の党の綱領「日本における社会主義への道」が廃止され、ようやく社会民主主義的な「新宣言」が採択されます。この時、社会主義協会北海道支部は東北支部と共に「新宣言」の賛成に回っています。したがって、村山さんが示唆するように社会主義協会の人が横路の台頭で排

除されたというよりは、北海道の協会自体が横路と近い路線に変わりつつあったのかもしれません。ただ、そもそも協会が道内でどういう影響力があったのか、単産ごとにどういう濃淡があったのか、そして「新宣言」にいたる社会民主主義路線への移行がそこにどのように作用したのか、は今後の検討課題です。

他方で、横路道政期の北海道社会党にとって道政与党になった経験は非常に大きかったと言えるではないでしょうか。横路は知事として道議会に登壇した際、亡くなったばかりの中川一郎を持ち上げる余裕を見せていますし、冒頭で紹介した川村清一も道議時代に自民党と信頼関係を築いており、意外なことに、町村金五知事から川村清一に充てた激励の書簡や、社会党道議団として町村知事に申し入れをしている写真も川村の伝記に残っています。野党時代にも与党時代にも、自民党と一定のパイプがあったのではないでしょうか。

(9) 横路が進めた自治体外交と安全保障政策

横路道政の特徴をあげるとすれば、自治体外交・安全保障の領域に関与したことです。北方領土墓参は重要な成果の一つに上げられますが、横路が外交に比重を置いていることの現れと言い換えることも可能です。当時の新聞を確認しても、横路ほど自治体外交をやっている首長はいませんし、中央の外交に反対する、あるいは対抗するのではなく、相互補完的、協力的なスタンスで、外務省とも総じて良好なかたちでやっていたという特徴があります。

自治体外交の相手はソ連と韓国で、ソ連には、極東を含めると相当な回数訪問しています。特にソ連崩壊の前夜もしくは直後の、ゴルバチョフ改革によって州に対する分権が進んだ一九八九年から九一年にかけての時期には、積極的な交流がなされています。元々、ロシア共和国はソ連邦政府と一体でしたが、自立してくるわけです。ロシア共和国やサハリン州はいうなれば西側諸国の地方自治体に擬することも可能ですから、自治体間外交を実施する意味合いが出てきますし、特にサハリン州ではフョードロフという強烈なキャラクターを持つ知事が登場し、彼が横路のカウンターパートとなることで自治体外交が活性化しました。自治体外交は領土問題にも影響を与え、例えば八五年に横路が訪問した時は公式回答しかされませんが、九〇年前後はリップサービスも含めて厚遇されるようになります。

また韓国との関係は当時、漁業問題がクローズアップされていて、二〇〇海里問題で漁場を求めていた韓国漁船が日本の北海道沖で乱獲して道内の漁師が怒り狂う一方、日本側も西日本の漁師は済州島周辺に漁場があるのでなかなか足並みがそろわず、複雑な外交問題となっていましたが、横路は訪韓を通じて、漁業問題、また大韓航空の新千歳空港乗り入れなどで一定の成果を上げています。また韓国政府では、最大野党の最有力者だということで横路を厚遇していたこと、日本の駐韓大使もそうしたロジックで横路の魅力を売り込んでいたことが、日韓双方の外交史料館に残された外交文書から判明しています。

その横路は知事を退任した一九九五年に『第三の極』（講談社）という本を書いているのですが、この中では北海道知事としての領土問題や経済協力問題だけではなく、冷戦終結後の安全保障についても記されています。特に冷戦終結によって「ひとつの世界」が到来して平和が訪れるのではなく、むしろ世界政治はより不安定になると横路は主張しており、とりわけ武器の移転によって紛争が世界的に拡大し、軍事危機はグローバルに拡大することを予想していました。さらに、戦後日本の外交は何かと他人任せで来たので、きちんと世界の問題に責任感を持って関与する必要があるとも指摘しています。

それ以外にも、エイズやパンデミックへの対応などにも言及があり、二〇二〇年代の現代に照らし合わせてみると、横路が予測したことが現在の世界政治にかなり当てはまるのは、非常に興味深いと言わざるを得ません。なお、よく知られるように、小沢一郎さんのお名前で出た『日本改造計画』（講談社）でも、国連中心主義を含めて、日本の世界へのコミットが強調されるのですが、私は横路もこうした思考に近いと感じていて、この二つの本を比較することで、リベラルでありながら（広い意味の）安全保障にも強いという横路の立ち位置が見えていくのではないか、また二〇〇〇年代初頭の民主党内での横路と小沢さんの接近の理由の一端も説明できるのではないか、と考えているところです。

(10) PKO法案を巡る社会党の迷走から横路は何を学んだのか

そうなると、一九九一～九二年のPKO法案を巡る田辺・山花執行部の「迷走」から横路は何を学んだのか、という疑問が出てきます。採決での牛歩戦術が有名ですが、実は社会党も最初からこの徹底抗戦を考えていたわけではありません。そもそも土井・山口体制下には自・社・公・民の四党間で、自衛隊とは別個の、国連と連携するような常設協力隊（軍事集団）をつくることに合意していました。しかしながら、民社党・公明党との連携交渉が失敗したことで、社会党は牛歩戦術と代議士の辞表提出に頼ることになったわけです。

こうした一連の行動に対して、細川、村山、第一次橋本の連立政権すべてに関わっていた社会党の浜谷淳さんは回顧録で、「私は次の三つの疑問が解けません。①山口書記長はなぜ四党協議の場を離れたのか、②田辺委員長はなぜ議員辞職願を含む徹底抗戦を選択したのか、③社会党が離脱した後の自公民協議のベースにあった『自衛隊とは別組織』はなぜ消えたのか、です」と述べています。『第三の極』にも現れた横路の安全保障構想を考えるときには、この苦い教訓から彼が何を学んでいたのかが大事なのではないかと感じています。

(11) 幻の横路新党

結局、横路孝弘は道知事を退いた後に社会党に復帰する道を選ばず、新党の立ち上げを考えていきます。この引き金となったのが、一九九四年一〇月に久保亘書記長が社会党道本部で「札幌談話」を発表したことです。また、これに先立つ九月に社会党臨時大会で村山首相が社民・リベラル勢力の結集を表明し、社会党を中心として民社党や社民連など今まで関係が良くなかった人たちと組むことが構想されていました。さらに、その一カ月前には山花前委員長が新民連を結成して、横路も新民連には関心を持っていたものの、九五年七月、鳩山由紀夫さんや海江田万里さんとともにリベラル・フォーラムを結成します。

要するに、当時の社会党には久保構想、村山構想、山花構想、という新党にむけた三つの流れが出来ており、村山さんは社会党をできるだけ残す方向の改革で、久保構想とはかなり距離があった。そして三者とも北海道の最有力者・横路を取り込むことを考えていました。特に久保は横路を新党の党首候補として期待していて、何回も会談を重ねていたのですが、結果としてこれは実現しませんでした（なおこの久保構想に対しては、村山さん側は新進党、もっと言うと小沢一郎さんとの関係が強いのではないかと疑っており、新党構想間の不信が強まっていきました）。久保と横路の関係も、横路がリベラル・フォーラムを立ち上げたころまでは順調でしたが、九五年晩秋くらいから行き詰まりが鮮明となり、久保は横路に対し「旬は短いからな」と決起を促したのですが、横路は決起しませんでした。

(12) 排除の論理と狂いだす歯車ー存在感が薄まる横路

横路は当時何を考えていたのでしょうか。リベラル・フォーラムを作る二カ月前、横路は日経新聞のインタビューに応じていますが、そこでは「自分としては今の二大政党制が自民党対新進党の構図になっていると。自民党がさ社と組む。新進党は小沢一郎である。この構図のオルタナティブを探したいと言っていて、それは保守＝自民党対リベラル・社会民主主義の二大政党制だと。新進党ではなく、もう少しリベラル側に寄せたい」と言っています。村山さんが久保と新進党の関係に不信を抱いたことに鑑みると、横路と久保とのすれ違いもここから説明できるかもしれません。横路が目指したのは、「保守＝自民党対リベラル・社会民主主義の二大政党制」という「オルタナティブ」にあったからです。

そうした「リベラル・社会民主主義」政党の基盤として、横路は（その後の民主党とは異なり）各地の地域政党、地域新党を軸にした新党を考えていたようですが、これに関してはやや波に乗り遅れた感があると言わざるを得ません。例えば、知事連合論は一九八九年から始まって、九三年に細川が首相になっていますから、九五年という時期は波に乗り遅れた感があります。最近日経新聞の大石編集委員が書かれた横路の追悼録でも、「横路さんは知事を二期で辞めて知事連合で出馬していれば、中央政界で影響力が持てたかもしれない。ただ、食の祭典問題があったために、これに時間

を取られてしまった」と指摘されています。

他方、横路は社会党を丸ごと合流することについて、「排除の論理」を鮮明としています。実際、「問題なのは憲法観とか歴史観でまだコミュニズムの残っているグループがあり、そういう人たちは自分たちで独自にやってもらわなければならない」と「コミュニズム」派を排除しつつ、民主党の結成に向かっていきました。浜谷淳さんはこれについて「結果として横路さんは、鳩山さんは菅さんの『排除の論理』に同調したことになりますね。民主党内でのポジション取りに失敗して、横路さんが存在感を薄いものにしたのは残念でした」と、かなり辛らつなコメントをしています。道内を除いて十分な独自基盤を持たないまま、鳩山さんと菅さんにいいところを持っていかれた結果、横路は党内の権力闘争に負けた。それは民主党代表選に二回出馬し、いずれも落選していることからも明らかです。

⑬ イデオロギーと権力対立から鳩・横戦争へ

鳩山由紀夫さんの名前が出てきましたので、彼に関する面白いエピソードを紹介したいと思います。民主党政権となった直後に発刊された『現代の理論』〇九秋号の中で、政治学者の住沢博紀先生が「私は、当時は何の根拠もなしに、ただ楽観主義の立場から、この民主党が将来は政権政党になると考え、一九九六年九月の設立決起集会に参加したことである。司会者以外に私はおそらくただ一人の大学教員だったと思う。当日、鳩山由紀夫が西郷隆盛の遺訓『命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり』を読み出したときは、社会民主主義を提唱していた私は心底驚いたが、政権政党をめざすということは、このようなタイプの人々とともにやることなのかと、妙に納得した記憶がある」と記しているのですが、「社会民主主義」の中に鳩山さんを入れていない点が興味深いところです。

結論を先取りすると、横路との関係で言えば、鳩山さんは「保守」を強調しているような印象を私は持っています。『財界さっぽろ』などでは「鳩・横戦争」と非常にキャッチーな表現が踊っていますが、この二人が水と油の関係であることは明らかです。実際、鳩山さんのインタビューを読むと、横路に対してかなり強い批判をしていますので、単にメディアの憶測だけではなく、本当に関係が良くなかったのだと思います。横路が亡くなった際の報道では「盟友」と紹介されていましたが、私は、とても盟友とはいえないという理解です。

また、鳩山さんのインタビューからは、民主党の候補公認問題で横路さんとかなりの緊張があったこと、さきがけ系と社会党系の調整が火種だったことが見えてきます。鳩山さんは落下傘ということもあって、社会党系をできるだけ排除したい。それが横路の影響力を削ぐことに繋がるからです。ですので、自らを（非自民の）保守に、横路を（非現実主義的な）革新に配置する構図を、鳩山さんは当時しばしば提出しています。

なお、鳩山さんと横路は左右や支持基盤の違いはあるものの外交政策では実は近い部分もあり、だからこそより共存不可能になったと考えることもできるでしょう。今回の報告に際して資料を読み学んだのですが、野党時代の鳩山さんが護憲／改憲争点を利用して横路の「左派性」を攻撃しているのがかなり印象的で、横路との差異化の必要に敏感だったことがわかります。実際、横路は二〇〇二年のイラク自衛隊派遣をめぐっては、党の方針に明白な造反をしていますし、また〇三年の民主党・自由党の合併に際しても、小沢さんとの関係をテコに、鳩山さんと対抗する動きを見せています。この時、鳩山さんが「横路さんはよくわからない人。合併後、外交安全保障や憲法などの政策課題が大きな問題となってくることは間違いなく、そこで横路さんらが足並みを揃えられるかどうかです。彼にはわかっていても、いわゆる護憲派の人たちとの協力関係をどこまで払拭できるかです」とけん制した上で、横路本人とその陣営の微妙な違いに言及しているのは、示唆的です。

この後、横路が民主党内で最も輝いた瞬間の一つは、〇四年三月に小沢一郎さんと共同で会談を行ったことでしょう。その肝は、父・節雄時代以来の長年の構想でもある、自衛隊と別組織の「国連待機部隊」を創設し、軍事的なものも含めた国際貢献と九条を軸とする戦後日本の憲法秩序を両立しようとするところにありました。この構想については全党合意を目指しましたが、小沢さんがいたにもかかわらず、うまくいかなかったようです。あるいはそれは、鳩山さんのような党内のライバルのみならず、足元の支持基盤からの反発も

あったのかもしれません。先ほど挙げた日経新聞の追悼録によれば、横路は「僕みたいなのが一番評価されないんだ」と述べ、左右どちらからも攻撃されることを嘆いていたようです。

おわりに

以上、横路家二代の政党指導を通じて、なぜ社会党は戦後北海道において大きな存在感を放ってきたのかという問いに、接近することをめざしてきました。まず、草創期の社会党の決定的な転換期は、一九四九年一月の衆院選で全滅したこと、と言えるでしょう。ここから横路節雄らは驚異的な立て直しを図り、北海道の社会党においては「反共左派」という独特のバランス感覚が早期に醸成、確立したように思います。この「反共左派」という選択を後押ししたのが、労農党と共産党という、より左の政党との競合だったのではないでしょうか。この両左翼政党との競合が独特のバランス感覚につながったと考えています。

また社会党道連は早い段階から、党本部から自律した地域政党的志向を持っていたことも特筆すべきかと思います。冒頭で紹介した『政党組織の政治学』に待鳥先生と大村先生が書かれた論文でも、民主党道連はかなり民主党本部から自立していると記されていますが、こうした動きの原点はおそらく一九四〇年代、五〇年代から見出せるということです。さらにこれと関連して、党本部および全国の社会党と比べて、安全保障や利益政治といった、脱イデオロギー争点への関心や意欲が強かったことも特筆すべきでしょう。たとえばソ連観についても、北海道が地理的に隣接し、北方領土（墓参）問題、漁業問題、自治体交流等の課題に対応してきたがゆえに、過剰に恐れたり、逆に過剰に近づいたりにいたらない一定のバランス感覚があったのではと思っています。

しかしながら、長い目で見れば六〇年代の横路・川村執行部が党本部とたとえば公認問題で揉めている形跡は見られますし、横路節雄が早逝してしまったこともあり、以降、北海道から全国的な社会党の指導者を輩出できなかったのも事実です（横路孝弘はプリンスではありましたが、反主流派に属していました）。このような社会党の中央における北海道派の後退は、日本の政党政治史や対ソ関係史の損失でもあったと思います。

このなかで、一九八〇年代に入ると社会党のなかでは社会民主主義路線が次第に強まり、また社公民路線に見られるように、自民党と対抗するための連合能力の回復も、部分的に進みました。こうした時代からはじめは道知事として、続いて新党指導者として台頭してきた横路孝弘は、冷戦終結後のグローバルな課題に敏感な感性、そして知性を備えていました。それは彼の著書『第三の極』を読んでも明らかですし、健全な社民的なリアリズムを備えていたものの、鳩山さんとの権力闘争に敗北してしまった。そもそも「食の祭典」問題で知事新党ブームの波に乗り遅れていた感もありました。小沢さんとの関係を含めて未知のことも少なくないですが、このような政局をつかむ能力は彼の弱点だったと思います。

実は最大のライバルたる鳩山さんは道知事選に二回出馬を断念していますので、北海道では元々横路が圧倒的優位でした。鳩山さんとは結局「さるかに合戦」的になってしまい、その結果が「首相」と「衆院議長」という政権獲得時の役職の違いに表れてしまったのではないか。最後に、この違いが生まれた背景のひとつとして、私は政権運営（連立政権）への参加の有無が案外大きかったのではないかと考えています。つまり横路は自社さ政権や細川政権のどちらにも参加せず、アウトサイダーとして批評家的立場にとどまりましたが、鳩山さんは細川政権では官房副長官ですし、村山内閣でも与党のさきがけの代表として貴重な経験を積んだと思われるからです。そしてこの連立政権への参加経験の有無は、鳩山さんと横路の分岐にとどまらず、平成時代における非自民政治家の間の分岐にも、作用するのではないかと考えています。非常に散漫な報告となりましたが、私からは以上になります。ありがとうございました。

〈まえだ　りょうすけ〉

本稿は、二〇二三年七月一四日に開催した第38回地域政府と政策を考える研究会での報告をまとめたものです。　文責・編集部